



Title	古墳時代の共同墓地 : 密集型土壌群の評価について
Author(s)	福永, 伸哉
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1989, 23, p. 83-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代の共同墓地

——密集型土壙群の評価について——

福 永 伸 哉

一 はじめに

古墳時代はその名の通り古墳という埋葬に伴う記念物によって人々の政治的、経済的優劣関係が顕著に示された時代であった。しかし同じ古墳という名で呼ばれる構築物ではあるが、全長四〇〇mを超える巨大な前方後円墳から直径一〇m程度の小円墳に至るまで、墳形や規模の違いによって実に多様な姿が見られる。この多様なありかたこそ被葬者間の複雑な階層関係を如実に反映するものであり、考古学が古墳時代の社会構造を解明する際の大きな手掛かりとして、古墳の調査成果を重要視する理由もそこにある。

しかしながら、古墳はその時代に生きたすべての人々の埋葬施設ではなかった。いくら小規模の古墳であってもそれを築造し得たのは、やはり一握りの有力者であった。したがって、墓制研究から古墳時代社会の全体像に迫ろうとするとき、古墳を築くことの出来なかった一般庶民層の墓を明らかにすることは、避けて通れない課題である。

小稿では、近年の発掘調査技術の進歩と大規模調査の増加によってその存在が注意されつつある密集する土壙群を一般庶民墓の有力候補と考え、その様々な特徴について検討を加え、古墳以外の墓からする古墳時代墓制研究の第一歩としたい。

二 密集型土壙群の概要

この種の遺構が初めて注意されたのは、一九七三年から一九七五年にかけて行われた高槻市狐塚古墳群の調査であった。以来現在に至るまで、一〇余りの遺跡で検出例が報告されている。ここでは、そのうち主要なものについて概要を述べることにする。⁽¹⁾

(1) 大阪府高槻市狐塚古墳群 (図1—c)

ここでは三五〇〇㎡の発掘区において、特に西半部を中心とした範囲から六〇〇基にも及ぶ土壙群が検出された。土壙の平面形は方、円、楕円など様々であり、規模は長軸〇・五mから3m以上までの大小があるが、平均的なものは一・五m程度である。約一割の土壙から出土した土器から見て、土壙群は五世紀末から形成されはじめ、一部は鎌倉時代にまで下るものも含まれている。土壙の分布は、東は五世紀代に築造された三基の方墳によって、南は東西方向の自然流路によって限られている。土壙内出土土器としては甕の比率がもっとも高い。

(2) 奈良県安堵町東安堵遺跡 (図1—b)

奈良盆地内の最低地に位置し、約二七〇〇㎡の発掘区のうち南部および東部を中心として二二八基の土壙群が検出されている。土壙の平面形は円、楕円を呈するものが多いが、一部が角ばったりした不整形のものもかなりあ



図1 密集型土壌群 (a 三宅遺跡, b 東安塔遺跡, c 狐塚古墳群, d 菱木下遺跡)

る。規模は長軸〇・五mから三m以上までであるが、一〜二mのものの比率が高い。土壙密集部分に南西から北東に延びる比高二〇cmほどの低位部（浅い落ち込み）が認められ、土壙群と同時期の土器に混じって、木製品や炭化粒が出土した。この低位部には土壙は営まれておらず、土壙群の分布と関連のある遺構と考えられる。約半数の土壙から土器が出土しているが、その大部分は甕であり、完形品が入っている場合もある。そのほかに注目される土壙内遺物としては、板状、杭状などの木製品があげられるが、いずれも完形ではなく、焼痕のあるものも含まれている。時期は弥生時代後期後半〜終末期（庄内期）。

(3) 京都府綾部市三宅遺跡（図1-a）

由良川支流、犀川左岸の低位段丘上に存在する。第Ⅲ、第Ⅳ調査区のほぼ全面にわたって五二一基の土壙群が検出されている。土壙の平面形は方形、円形、楕円形などであり、規模は長軸〇・六mから最大のもので三・四mをはかる。土壙群の西には幅六mの浅い溝状遺構が存在し、これより西には土壙は認められない。土壙内からは甕形土器が出土する割合が高く、完形品に近いものも多い。また、板状木製品が検出される土壙もある。時期は瓦器を出土する僅かな土壙を除いて、弥生時代終末期を中心とし、一部古墳時代初頭に下るものもある。ほぼ同じ時期の東安堵遺跡と類似する点が多いことには注目しておきたい。

(4) 大阪府堺市長曾根遺跡

西除川左岸の中段段丘面に位置し、標高約二三mをはかる。五万㎡を超える広大な調査地のなかの数箇所において土壙群が検出され、その総数は七三八基を数える。土壙の平面形は隅丸方形、隅丸長方形、円形、楕円形、そしてこれらに含まれない不整形のものがある。規模は一m未満のものから四m以上のものまでであるが、二〜三mのも

のがもっとも多い。土壙群は大きく見て四つの分布域に分かれ、その間には同時期の幅約3mの自然流路が存在しており、ここでもまた流路と土壙分布の関連性がうかがえる。土壙内にはほとんど遺物は存在しないが、径1m以下の小土壙の一部からは故意に破砕したと考えられる土器が出土する例があり、「供献土器の埋納土壙」とされている。土器は土師器の甕を中心として、鉢、壺、小型丸底壺などがこれに加わる。時期は古墳時代前期～中期である。当遺跡においては、調査者によって土壙埋土の詳細な観察と記録がなされており、この種の遺構の性格を考える上で有力な手掛かりとなる。

(5) 大阪府堺市菱木下遺跡(図1—d)

石津川左岸の中段段丘上に存在し、標高二三～二四mをはかる。一万㎡を超える全調査区のうちⅡE区の東部からⅡW区の西部にかけての約一六〇〇㎡の範囲から三八〇基の土壙が検出されている。巨視的に見れば土壙群は空地をはさみながら大きく三群に分かれ、さらにその中に小群の存在が認められる。平面プランは円、楕円、長楕円などを呈し、規模は〇・五m未満のものから二・五m以上のものまでであるが、最も多いのは一～一・五mのものである。約一割の土壙から土器が出土しており、器種としては須恵器の甕が最も多い。この須恵器の破片については調査者の丹念な接合関係の追及により、異なる土壙からの出土片どうしが接合関係を持つという興味深い事実が明らかにされている。これらの出土土器を参考にすると、土壙群の時期は、六世紀後半から七世紀を中心とし、一部は八世紀代に下るものもあると考えられる。

以上五つの主要な遺跡についてその概要を述べたが、このほかにも類似する遺構が検出されている例として、京都府京北町上中遺跡(弥生終末期～古墳前期、三七基)、奈良市池田遺跡(古墳前期～中期、一五〇〇基)、大阪

府堺市大和川今池遺跡（古墳後期？、二〇〇基）、同市万崎池遺跡（古墳中期～後期、一部前期？、四六〇基）、大阪府富田市新家遺跡（古墳後期、一部奈良、鎌倉、四四〇基）、大阪府寝屋川市讚良郡条里遺跡（古墳後期、三五〇基）などがあげられる。⁽²⁾

三 土壌群の特徴とその機能

筆者は、結論的に言えば、この密集する土壌群の多くを土壌墓と考えるわけであるが、直接的な証拠、すなわち人骨の検出あるいは埋土の自然科学的分析などによってこれが証明された例は、まだない。したがって、まずこれらの土壌について、その機能をいくらかでも反映しているのではないかと考えられる諸特徴を見つけたし、検討してみたい。

第一は土壌内の埋土の状況である。長曽根遺跡においては一つの土壌のなかに黄色系と褐色系という、対照的な色調の埋土が見られるため、埋め戻しの状況がよくわかる。それによると、「埋土が小単位のブロック状をなすもの」が多く、そのなかでも褐色系土が土壌の一方に集中し、さらに反対側の土壌壁にも回るありかたを示す例が多い（図2）。これらの事実から調査者は、「土壌墓を掘り上げてすぐ埋戻したため、鋤で投戻す一かたまりの土がブロック状に堆積したものである」とし、その際「黒褐色系土を底にまんべんなくひいて、あまった黒褐色系土を一方にかためて埋戻す」という「人間の意思」が働いていると推測する。この埋土堆積状況に見られる類似性からは、土壌を掘削して埋め戻すまでの行為があらかじめ決められた手順ののちとして遂行されている可能性をうかがわせる。長曽根遺跡以外では埋土の堆積状況について詳しく報告された事例が少ないが、公表されている土層図

を見るかぎり、自然に埋まったというより人為的に埋めたと解される堆積状況を示すものが多い。

第二に土壌の分布状況を検討してみたい。土壌はある一定の面積の中に同じ密度で存在するのではなく、しばしば空閑地を間にはさみながら何箇所かに特に集中するありかたを示す。菱木下遺跡においては幅五〜一〇mの墓道状の空閑地をはさんで三群に大きく分かれる。しかも、この各群内においてもまた、小さな空白地がみられ、それによってさらに小群に分割できるようなありかたを示している。このことから、菱木下遺跡の大規模な土壌群の構成原理を復元するならば、まず基礎となる小群がいくつかあつまって三つの大きな群をつくり、これが墓道状空閑地をはさんで有機的に結合し大規模な土壌群を形成しているということができよう。また、三つの大きな群のうち少なくとも二つはほぼ同じ時期に形成が始まっていることから、この土壌分布が長期間の土壌掘削によって結果的にそう見えるようになったのではなく、当初からこうした構成原理にもとづいて形成された可能性が高い。

また、極端な密集部分を除いては土壌どうしが乱雑に切り合うものは少なく、以前に掘削した土壌の位置をかなり正確に認識していることがうかがわれる。おそらく掘削地点を識別できる構造物が地上に設けられていたものと見られる。

以上のような分布の特徴は、他の遺跡でもしばしば観察されるところである。土壌群はやみくもに掘られたのではなく、かなりの計画性のもとに配置されたものであり、ごみ穴や粘土採掘壕とは言い難い状況を示している

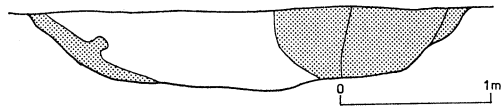


図2 長曾根遺跡の土壌埋土断面 (注1文献より作成)

と考える。

第三は土壙群と流路の関係である。狐塚古墳群、三宅遺跡、長曾根遺跡、池田遺跡、新家遺跡などでは、土壙群を分割するように、あるいは土壙群全体の一边を画するように流路が存在している。流路内の出土遺物は遺跡によって量の多少があるが、池田遺跡においては流路内から多量の土器が出土し、それらが土壙内から検出された土器と時期的に一致すること、土壙と流路の間に切り合いが見られないことから、両者が密接な関連をもつて存在していることが指摘されている。⁽⁴⁾東安堵遺跡では長く延びる浅い落ち込みが同様の役割を果たしていると思われる。

ここでは、土壙内から煤の付いた甕形土器が多数検出され、一方、落ち込み内には土器と共に灰層が堆積している状況が観察された。このことから、調査者は火を使つての煮炊きを土壙外で行つた後、使用された土器は土壙内へ埋置し、残つた炭や灰が落ち込み内に廃棄された状況を推定して、土壙群と落ち込みの密接な関係を示唆した。⁽⁵⁾

このように、密集型土壙群の立地としては小河川に沿つた場所が選ばれる傾向があると共に、その流路を土壙配置の中に巧みにとりいれ、時には土壙群造営に伴う行為（筆者は葬送儀礼を考えている）のなかで使用した物の廃棄場所として利用するなど、土壙群と流路がセットとして機能していた様子がうかがえる。

第四は土壙の形状である。土壙の平面形は円形、楕円形、方形、長方形などである。不整形もあるが、アメーバ状のような極端なものは少なく、一応整つた形を志向していると思われる。底面は皿状のものや凹凸があるものが多く、平坦なものはむしろ少ない。土壙壁の立ち上がりは緩やかな法面をもつものと、ほぼ直立するものがあるが、オーバーハングするものはほとんどない。粘土採掘壙の場合は土壙が粘土層に達すると土壙壁部分からも粘土を掻き取るため、その部分がオーバーハングすることが多く、奥行は五〇cm以上に及ぶこともある。⁽⁶⁾今検討している土

墳群にこうした例がみられないことは、これらが粘土採掘以外のものである可能性を物語っている。ちなみに長曾根遺跡においては、土壇底面が粘土層をこえて下層の砂礫層まで掘り抜いていること、粘土層の存在しない地点にも土壇群が形成されていることから、粘土採掘の可能性を明快に否定している。

第五は出土遺物の問題である。土壇から遺物が検出されることは少ない。せいぜい全体の二割の土壇から、土器（それも完形品は少ない）が出土する程度であり、こうした遺物の少なさがこの種の土壇群の大きな特徴となっている。ただ、東安堵遺跡と三宅遺跡では様相が異なり、半数を超える土壇から土器が検出されている。その器種がほとんど甕形土器に限られることは重要である。また、両遺跡は土壇内から板状木製品を検出していることも共通点があり、時期も弥生終末期前後で一致している。これは単なる偶然とは考え難く、同様の思想にもとづいた習俗が両遺跡でとり行われていると見るのが妥当である。旧国名で言えば大和、丹波という離れた地に存在する遺跡で同じ状況が明らかになったことは、同時期の近畿地方において類似する遺跡が今後発見されることを予想させる。

ところで、筆者は弥生終末期の土壇群における甕形土器の多用に注目している。なぜなら、その後古墳時代を通じて存在する密集型土壇群において、土器の出土量は少ないものの、器種としては甕の占める割合が最も大きいという状況がしばしばうかがえるからである。つまり、土壇内に甕を入れるという同じ習俗が時代を越えて受け継がれ、地域を越えて広がっている可能性が高いのである。

以上五つの点について、良好な遺跡の調査例を中心にしながら、土壇群の諸特徴を検討してみた。すべての点にわたってすべての遺跡で同じ状況が認められたわけではないが、かなりの共通項が浮かび上がったのは事実であり、

最後に検討したようにそれは甕の多用という土壙に伴う習俗のレベルにまで及んでいる。決定的な根拠がないことは先に述べた通りであるが、ここで検討したような諸特徴を大地に刻み残すような人間活動として現時点で考える最も蓋然性の高いものは、古墳を築き得ない一般庶民層の共同墓地である。

四 密集型土壙群からみた一般庶民層の動向

密集型土壙群が一般庶民層の共同墓地であると認められるなら、土壙の群構成などを分析することによって、集団の内部構造に迫ることも可能である。

(1) 土壙群の構成と集団構成

図3は長曾根遺跡の土壙群を構成する小群のうちX・XVI群における土壙分布状況を示したものである。これをみると、当群は二〜三基の土壙からなる小単位が七つほどと、これに単独に存在する土壙を加えて全体が構成されていることが観察できる。当遺跡において土壙が二基隣接して存在する例が多いことはすでに指摘されており、調査者は、この二基に葬られた人間を夫婦と考え、土壙群が「家族的な血縁集団としてのまとまりを最小単位として構成されている」と推定した。筆者も基本的にはこの考えを支持したい。すなわち二基の夫婦の墓に、場合によってはこれにごく近親者の墓を加えたものを小単位としてX・XVI群が構成されているといえよう。

長曾根遺跡では四〇の小群が指摘されている。群の数や線引きについてはやや異なった見方もできるであろうが、いま重要なのは七〇〇基余りの土壙群を分割する原理が見られることである。もう一度その状況を整理すると、土壙群はまず四箇所の大きな群に分かれ、各大群の中が数個から十数個の小群に分かれ、さらに小群の中に二〜三

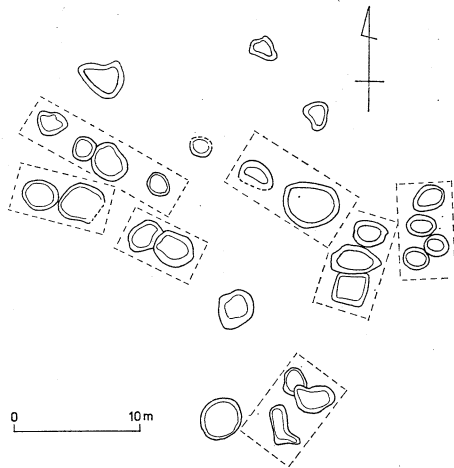


図3 長曽根遺跡X X VI群土壙分布状況
(注1文献より作成)

基の土壙からなる最小単位が存在するという構成になる。それぞれのレベルの群が実際にいかなる人間集団にあてはまるのかという点は、資料の少ない現状では確定的なことはいえない。また、こうした構成がすべての遺跡に共通するものではないことも事実である。しかし、一〇〇年余りの遺跡の継続期間と七〇〇基という土壙の数(未掘部分を含めるとまだ増える可能性あり)を勘案すれば、これが複数の集落の人々の共同墓地であった可能性が高いと考えられるのである。あえてモデル的というなら、大群は各集落に、小群は世帯共同体に、最小単位は世帯に相当するという見通しを述べておきたい。

(2) 長方形墓地区画の存在

図3によって、X X VI群の土壙分布状況をみると、土壙が列状にならんでいる様子がうかがわれる。群内西部では北西から南東方向に、群内東部ではほぼ南北方向にそれぞれ列の軸線が存在している。前節で述べた二〜三基からなる最小単位内では、土壙が団子状に集まるというより、列状に並ぶことが多い。当群では特にそれが顕著であるが、他の遺跡でもこうした状況はしばしば認められる。これは、墓域内に長方形の区画がもうけられ、各区画が世帯ごとの墓地として割り当てられていたことを示すものであろう。区画部分には何らそれを示すような遺構は存在していない。おそらく実際には

各家の墓葬が土まじゅうのように並ぶ間を通る墓道的な部分によって、区画が認識されていたのであろう。群中に単独で造られている土壙についても、こうした区画割り当てにもとづいて存在していると推定される。このように一見乱雑に広がるような土壙群も、本来は計画的に配置された墓地区画が集積した姿であったと考えられる。

世帯共同体の墓域に対応すると考えられる小群の中に含まれながらも、各世帯の墓は独立した墓地区画をともなっており、造営されている。古墳時代の一般庶民層における世帯共同体と世帯の関係を示す事例といえよう。

(3) 集団間の人間交流

菱木下遺跡や万崎池遺跡では、異なる土壙から出土した須恵器片が接合関係を持つことが明らかになっている。切り合いのある土壙どうしの場合には、古い土壙の遺物が新しい土壙の埋土に紛れこむこともありうるが、それ以外の場合には別な理由を考えることが必要となってくる。

図4に示したのは万崎池遺跡における土壙内出土土器の接合関係である。直線で結んだ土壙は出土土器が接合関係にある。これによると、切り合い関係のない土壙間にも接合関係がみられ、中には一〇m以上離れている土壙もある。こうした状況からみて、どこかで割られた土器が数箇所

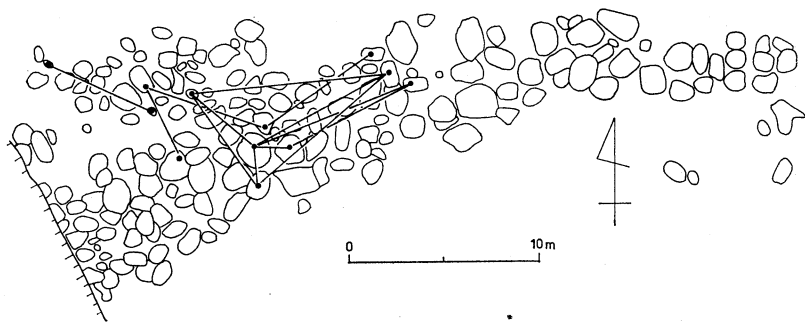


図4 万崎池遺跡第V調査区における土器の接合関係（注2文献より作成）

の土壙に人為的に入れられたと解釈するのが妥当であろう。

では、なぜ同じ個体の土器片を分け持つことが必要なのであるか。万崎池遺跡に限らず、この種の土壙から検出される土器は破片であることが多い。つまり、あらかじめ割られた土器の一部を副葬しているということである。筆者は、葬送儀礼の中で使われた土器が割られて、埋葬の際に土壙に入れられるのではないかと推定している。一つの解釈として、同一個体の破片を持つ土壙墓の被葬者が、あるとき取り行われた同じ儀礼に関与した人たちであったと考えれば説明をつけることはできる。具体的なイメージとしては、親、兄弟など肉親の葬儀の際に使われた土器の破片を自らの、あるいは彼らと関係の深い人の墓に持ち込むことである。菱木下遺跡では最高三〇m近くも離れた土壙間において接合関係が見られる(図1—d)。しかも、当遺跡では三つの大きな群があるが、個々の群を越えて他の群との間にさえ接合関係がみられるのである。上述の想定を適用するならば、異なる群に血縁関係のある人間が存在していたことになる。菱木下遺跡の大きな群はそれぞれが一つの集落の墓地と考えられるから、想像をたくましくすれば、異なる集落に親子、兄弟などの肉親が婚姻などによって分かれ住んでいる状況を示している可能性があるだろう。もっとも、この想定の実性を高めるためには少なくとも同様の事例がさらに増加しなければならない。現時点では、こうした興味深い事実の存在を紹介し、それに対する解釈の一例を示すことによって、今後の調査の際の留意点を指摘するにとどめたい。

五 埋葬姿勢の変化

近畿地方における埋葬姿勢は、縄文時代に一般的であった屈葬から弥生時代には屈肢葬を経て徐々に伸展葬へと

向かい、古墳時代にはほぼすべてが伸展葬になるという大きな流れが指摘できる。⁽⁸⁾その後の変遷は資料的制約もあって十分明らかでないが、平安時代以降の土壙墓、木棺墓から検出される人骨は手足を曲げた屈肢葬や腰まで折り曲げた屈葬である場合が多い。

さて、ここで対象にすべき古墳時代は、古墳から発見される人骨、あるいは古墳で使用された棺の規模を見るかぎり、ほとんどすべてが伸展葬である。ではこの時代の一般庶民の墓においてはどうかであろうか。

密集型土壙群の規模について統計的に処理できるだけの数値が報告されている遺跡は少ない。図5は土壙規模のわかる遺跡について、土壙長軸を一〇〇cm未満、一〇〇～一五〇cm未満、一五〇cm以上の三者に分けて、それぞれの比率を图示したものである。新家遺跡については報告書の記載内容との関係で少し分類が異なっている。成人を伸展葬で葬ることのできる規模のめやすを一五〇cmと考えると、東安堵遺跡と長曽根遺跡と長曽根遺跡ではこれを超えるものが半数近く、あるいは大多数を占めており、基本的に伸展葬が行われたことを示しているといえよう。これに対して、菱木下遺跡、万崎池遺跡では一五〇cm未満のものが多数を占めており、小児用埋葬の混在だけでは説明し難い高率で

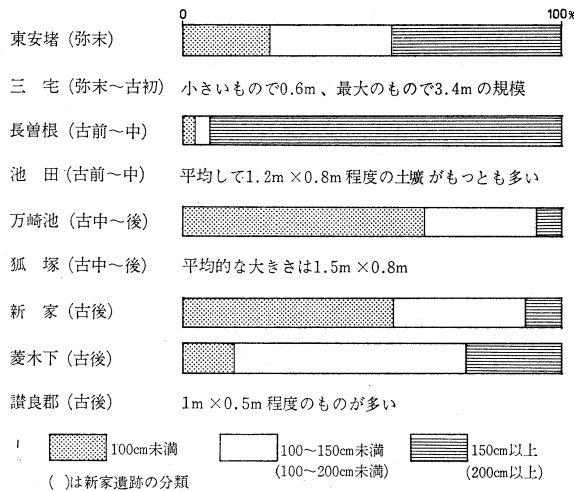


図5 各遺跡の土壙長軸規模の割合

ある。また、新家遺跡においても、規模の分類境界は異なっているが、後者と同一傾向を示しているものと見られる。すなわち、これらの遺跡においては、屈肢葬あるいは屈葬が行われていた可能性が高いのである。このほかの十分な数値が公表されていない遺跡については、この点に関する報告書の記述を同図に書き込んでおいた。

さて、これらの状況をまとめると、まず第一に古墳時代の共同墓地においては伸展葬を基本とする遺跡と、屈肢葬、屈葬を主に行う遺跡の二者があることが認められよう。さらに時期的な関係をみると、弥生終末期～古墳前期の遺跡では伸展葬が多く、古墳後期の遺跡では屈肢葬、屈葬が多い傾向がある。すべての集団がこうした傾向のものにあるわけではなからうが、このような変化がうかがえること自体は注目すべきである。

いっぽう、古墳に埋葬されるような有力農民クラス以上は古墳時代を通じて伸展葬を採用しており、縄文、弥生、古墳と時代を経て変化してきた埋葬姿勢の変遷の延長上にある。共同墓地において古墳前期と後期の間に埋葬姿勢の変化の傾向が見られることを考え合わせると、埋葬姿勢という埋葬習俗のうちの基本的な部分において、古墳を築く有力者層と密集型土壙群を営む一般庶民層の間に、ある時期から大きな隔たりが生まれてきたということがいえる。墓地の形態だけでなく埋葬に関する思想的な面でも両者の墓制が全く別個のものとなったのである。

なお、平安時代以降の屈肢がいつから、どのような脈絡で出現してくるのかについてはまだほとんどわかっていない。ここで検討した古墳時代の一般庶民墓の屈肢葬がその淵源である可能性も考えながら、今後検討していきたい課題である。

六 密集型土壌群出現の背景

これまでの考察によって、密集型土壌群が古墳時代の一般庶民の共同墓地であり、そこでは古墳で行われる葬送習俗とは別個のものが存在していたことを指摘した。最後に、この密集型土壌群が形成される背景、弥生集団墓との相違などを考えることにより、現時点での歴史的な評価を試みてみたい。

(1) 出現の背景

近畿地方で現在確認されている密集型土壌群のうち時期的に最も遡るのは、弥生後期後半から終末期に比定できる東安堵遺跡である。また、これとほぼ近い時期に三宅遺跡、上中遺跡の土壌群形成が始まっている。弥生後期の墳墓群は調査自体がまだ少ないが、弥生中期の墓地についてはかなり調査例があるにもかかわらず、こうした不整形土壌が数百基以上もいるいと存在するような遺構は発見されていない。少ない資料から推し量るのは危険ではあるが、筆者はこうした形態の共同墓地が出現するのは弥生後期、その中でも後半以降であると考えている。⁽¹⁰⁾

弥生時代後期後半は、稲作伝来以来形成されてきた弥生農耕社会の大きな変革期であった。弥生時代中期の近畿地方では、核となる大集落とその周辺に分布する小集落からなる共同体的なまとまりが中小河川の水系ごとに存在していた。この中心的な大集落はしばしば防禦施設である環濠によって囲まれており、それがまた集団の共同体的まとまりを反映するものでもあった。ところが、近年の集落研究によれば、畿内地方の環濠集落は後期後半には解体し、共同体の首長は一般成員の居住地とは異なる場所に居館を営むようになったことが明らかになりつつある。⁽¹¹⁾ 大集落が解体した後、階層別に居住地を構えるという動きは急速に進行していったとみられ、実例のわかっている

古墳時代中期以降には、首長層から有力農民層、さらに一般庶民層にいたるまでそれぞれが異なった形態の集落を形成していたことが判明している。弥生後期後半〜終末にかけては墓制の面では共同体首長の個人墓が墳丘墓として出現してくる。これは、いま述べたような大集落が分解して首長の居館が成立する動きと軌を一にしている。首長の居館と墳墓が独立し、これに次ぐ有力者たちも独自の居住区に移ったあとに残された一般成員、これこそが、数百基にもおよぶ等質的な土壙からなる共同墓地を営んだ主体者であった。密集型土壙群は、階層分化の末に引き起こされた共同体的な集団の分解、環濠集落の解体という社会の激変を背景として出現してきた墓制であるといえよう。

(2) 無棺墓の持つ意味

すでに述べたことであるが、密集型土壙群の土壙は平面形が整った長方形を呈するものは少なく、底面は凹凸のあるものが多い。また、土層観察の結果からみても木棺の使用は認められない。弥生時代の共同墓地においてはかなりの比率で木棺が使用されていたと考えられるから、古墳時代の共同墓地の特徴の一つとして無棺埋葬の急増があげられよう。この現象の背景を考えると、かつての弥生社会において棺が持っていた社会的意味を思い出してみる必要がある。弥生時代には集団ごとに同じ型式の棺を使用する慣習があり、他集団出身者をもいた集団で使われていた型式の棺を用いるという約束があったことが明らかになっている。¹²⁾すなわち、棺は集団内において共通の埋葬習俗の一要素として集団のまとまりを保つ意味合いをもっていた。ところが、弥生後期後半以降の階層分化の激化の中で、環濠集落に象徴されたような弥生集団のありかたは急速に変質していった。階層別に住居を構え、階層別に墓地を営むという動きが支配的となったいま、棺は集団の共通の埋葬習俗を示すという弥生的な役割を失

い、庶民層はこれを使用しなくなった。そして、それにかわって彼らは、甕を使用する儀礼というあらたな共通の習俗を生みだしたのであった。

七 結 語

弥生時代の共同墓地は、階層分化の未熟な段階では内部に顕著な差は見られなかったが、その後は階層分化による集団内の優劣関係を敏感に織り込んで墳墓間に質的差異が生まれるようになる⁽¹³⁾。そして、弥生後期後半以降この動きが極まったとき、首長の個人墓は共同墓地を飛び出して、弥生共同墓地は分解する。密集型土壙群はこの分解を経て、階層分化の結果下位に位置した人々の等質的な共同墓地として登場してくる。もともと、こうした変化がすべての地域で同時に進行したとは限らない。集団規模の大小、立地環境の違いなどによっては階層分解の進展のしかたも異なり、無棺の密集型土壙群を生みださない地域も依然として存在したであろう⁽¹⁴⁾。また、古墳時代の間にも生産力の発展を背景にして、密集型土壙群を営んでいた庶民層の中から台頭して、中小古墳の築造を始めた勢力があったに違いない。このような、新たな階層分解を経ながらも、密集型土壙群は一般庶民層の共同墓地形態として古墳時代を通じてみられ、おそらくそれ以後にも続いていくと考えられる⁽¹⁵⁾。

密集型土壙群は地味な遺構である。小稿で取り上げたものは、特に大規模な墓地を形成していたゆえにわれわれの目にとまるところとなったとも言える。実際にはもっと小規模な土壙群が多かったと考えられ、そういう目でみたらこれまでに調査されている遺跡の中にも再検討できる例があるかも知れない。しかしそれは今後の課題として残された。密集型土壙群の研究はまだ緒にいたばかりであり、小稿では今後考察すべき問題点の提示に主眼を置

いて述べてきた。近年、首長層における実態が明らかにされ始めた集落研究と、逆に一般庶民層の実態に光のあたり始めた墓制研究。これらを結合させることにより、古墳時代社会の研究がまた一歩進むことを信ずる。

注

(1) 以下で説明する五遺跡については次の文献を参照した。

狐塚古墳群 『昭和50年度説明会資料1』高槻市教育委員会 一九七五、原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』一一一 一九七七。

東安堵遺跡 泉武編『東安堵遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四十六冊 奈良県教育委員会 一九八三。

三宅遺跡 竹原一彦「三宅遺跡」『京都府遺跡調査概報』第31冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 一九八八、

竹原一彦「昭和63年度発掘調査略報、三宅遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第31号 京都府埋蔵文化財調査研究センター 一九八九。

長曽根遺跡 川口宏海、稲垣正宏、上野俊男、岡本圭司『長曽根遺跡発掘調査報告』堺市文化財調査報告第27集 堺市教育委員会 一九八六。

菱木下遺跡 久米雅雄、佐久間貴士、村上富喜子「菱木下遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告』I 大阪文化財センター 一九八四。

(2) これら六遺跡については次の文献を参照した。

上中遺跡 増田孝彦「上中遺跡第3次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第20冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 一九八六。

池田遺跡 藤井利章「奈良市池田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』第一分冊 奈良県教育委員会 一九八一。

大和川・今池遺跡 森村健一編『大和川・今池遺跡』II 大和川・今池遺跡調査会 一九八〇。

万崎池遺跡 橋本高明、中井貞夫、福田英人、石神怡、芝野圭之助、小島容子「万崎池遺跡」『府道松原泉大津線関

連遺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪文化財センター 一九八四。

新家遺跡 今村道雄『新家遺跡発掘調査概要』Ⅱ 大阪府教育委員会 一九八〇。

讚良郡条里遺跡 『讚良郡条里遺跡現地説明会資料』 大阪府教育委員会 一九八八、西口陽一「讚良郡条里遺跡の

発掘調査」『第20回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』一九八九。

このうち、上中遺跡では土壙群の機能を一応粘土採掘壙と推定されているが、あわせて墓である可能性も述べられている。

(3) この点については簡単な素描を示している。福永伸哉「共同墓地」(都出比呂志編『古代史復元』第6巻 古墳時代の王と民衆) 講談社 一九八九。

(4) 注2、池田遺跡概報一八九頁。

(5) 注1、東安堵遺跡報告七一頁。

(6) 栗原文蔵「粘土及び用土の採掘」(斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻) 吉川弘文館 一九八八。

(7) 菱木下遺跡、万崎池遺跡、三宅遺跡などでもみられる。

(8) 福永伸哉「埋葬姿勢研究序論」『兔原——森岡秀人さんと島聖子さんの御結婚によせて——』芦屋郷土資料室OB会 一九八八。

(9) 古墳前期～中期の池田遺跡では、土壙長軸一二〇cm程度のものが多くとされているが、全体図から読み取るかぎりでは一五〇cmを超えるものもかなり存在している。池田遺跡において屈肢葬が行われた可能性は十分あるが、それが主流であったとはいえない。正報告の刊行をまって詳細な検討を加えたい。

(10) ただ、階層分化の動きが特に速かったと考えられる畿内中心部などではさらに古い時期に密集型土壙群が存在する可能性がある。

(11) 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 一九八九、二〇四～二〇五頁。

(12) 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第三二巻第一号 一九八五。

(13) 高倉洋彰「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』第二〇巻第二号 一九七三。

近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店 一九八三、一四〇～一七四頁。

(14) 木棺を用いる小規模な共同墓地は古墳時代前期にも残存するが、大規模なものは福岡県汐井掛遺跡など僅かな例を除いては確認されていない。また、これらの遺跡は基本的には中期以降には続かない。

(15) 大阪府藤井寺市北岡遺跡、葛井寺遺跡では奈良、平安の土壙群が検出されている。粘土採掘墳とする見方も示されているが、完形の甕を埋納したりする状況がみられ、古墳時代の密集型土壙群との類似点も存在する。このなかに粘土採掘墳が存在する可能性を否定しないが、土壙墓もかなり含まれていると考える。

天野末喜ほか「北岡遺跡の調査」、上田睦ほか「葛井寺遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅲ 藤井寺市文化財報告第3集 藤井寺市教育委員会 一九八八。

一瀬和夫ほか「北岡遺跡の調査」『南河内遺跡群発掘調査概要』Ⅰ 大阪府教育委員会 一九八八。一瀬氏は土壙群の性格については慎重な態度で明言を避けている。

英文要約作成にあたっては、ハーバード大学大学院人類学研究科博士課程、佐々木憲一氏から多大な援助を得た。なお、この研究については一九八九年度文部省科学研究費（奨励A）の交付を受けている。

（文学部助手）